

【令和5年度実績】

1. SDGs 教育・研究活動の進展と数年にわたる外部資金受入の順調な増加

「社会との共創」

No.20 (2)-1 社会の要請に応える研究の推進, No.23 (3)-2 卓越した研究を基盤とした産業界等との共創教育の展開, No.27 (1)-2 持続可能でレジリエントなグリーン未来社会構築への貢献

実績報告

本研究科では、グローバル共生社会系の国際政治経済論講座の教員が中心となり、持続可能な社会の構築のために、脱炭素、循環経済、地方創成などをテーマに、地球規模課題問題の解決に貢献する研究・教育を展開している。その成果は多様な形で社会に還元されているが、その過程の中で産学の連携をさらに深め、企業からの受託・共同研究費、寄付金の受入、SDGs 教育実績、研究・教育成果のメディア紹介などが数年にわたって順調に伸びている。また、最近の研究成果の社会還元のために特許出願やベンチャー企業の立ち上げの準備を進めている。

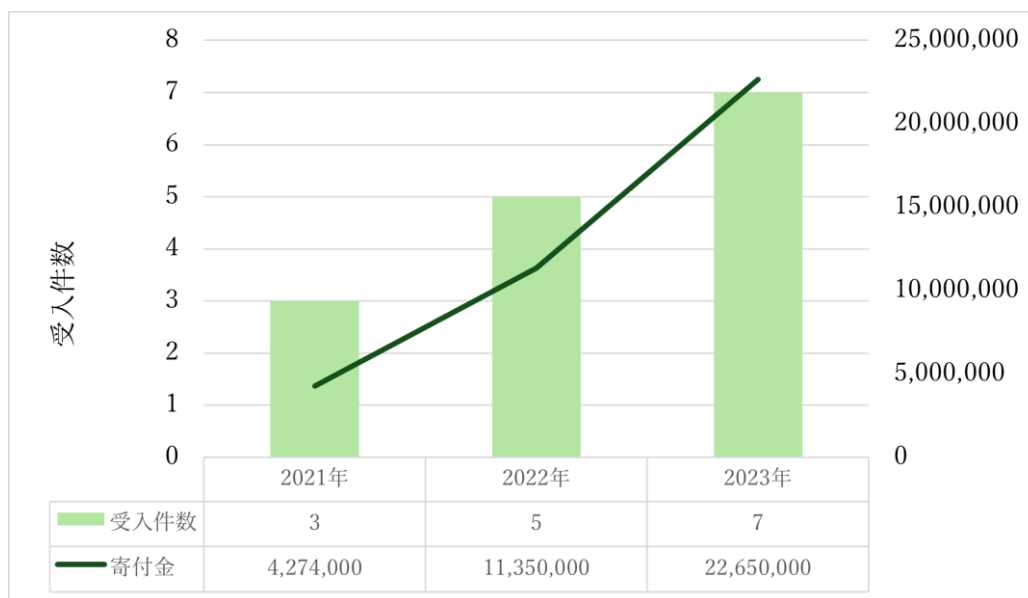
主な取組として以下の3つがある。

[1] 国内外における民間企業との共同研究実施

・主な事業

- ①「被覆電線由来廃プラのマテリアル・ケミカル・サーマルリサイクルの最適化」共同研究 (11,000,000 円、株式会社ヨシムラ)
- ②「使用済み自動車由来の廃プラスチックの素材選別装置開発」共同研究 (3,000,000 円、西隆機械株式会社)
- ③ 寄附講義「プロジェクトリスクマネジメント II」実施にかかる MS&AD インシュアランスグループホールディングス株式会社及び MS&AD インターリスク総研株式会社からの寄附 (2,000,000 円)

下図は直近3年の研究費受入状況の推移を表すグラフである。毎年、順調な増加を見せている。



[2] 産学連携による SDGs 教育活動

①学内における SDGs 教育

- ・挑創カレッジ「東北大学 SDGs プログラム」への貢献

→必須科目「SDGs 入門」の提供

→高年次科目「地球規模課題科目」の運営・授業提供(委員長・副院長を担当)

- ・大学院 G2SD(Global Governance & Sustainable Development)プログラム(英語)の提供

- ・MS&AD の寄附講義実施「プロジェクトリスクマネジメント論」

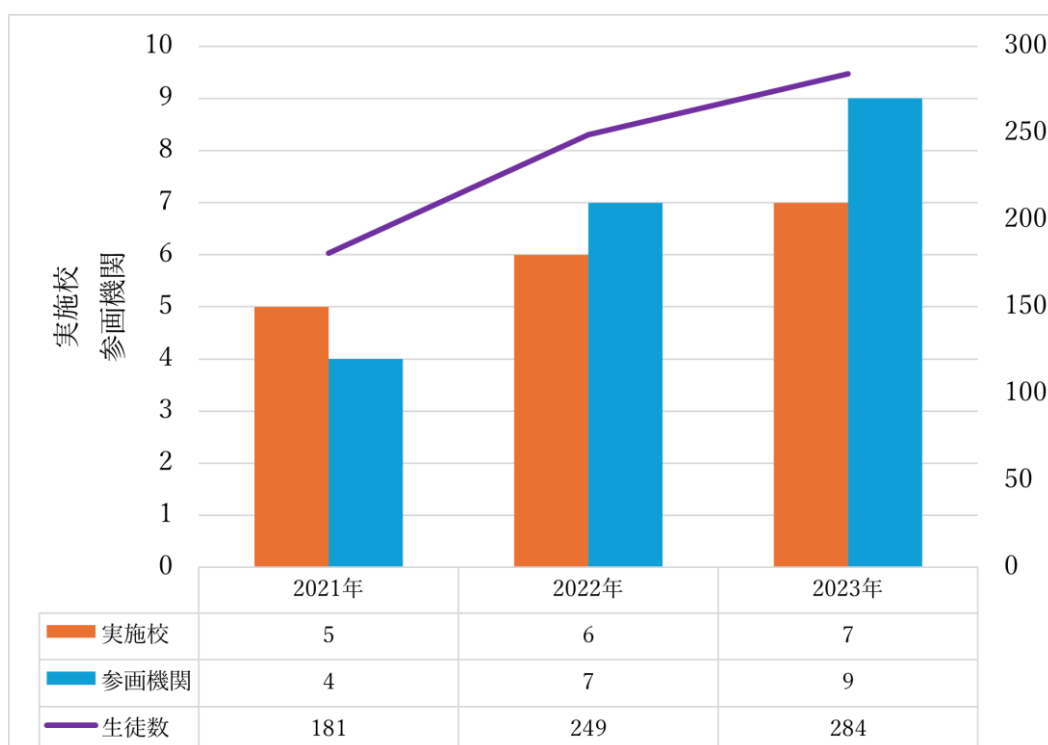
②被災地における産学連携による SDGs 出前授業の実施

震災直後から文科省の「復興教育支援事業」に採択され実施していた出前授業を 12 年間継続実施しており、直近の 3 年間は東松島市を対象に、産学官連携による SDGs 出前授業を実施している。毎年、この活動に賛同し、出前授業に参画する団体が増えており、参画機関、授業実施校と学生数も順調に増えている。また、様々なメディアに取り上げられており、社会的に関心が高くなっていることが分かる。

- ・主な参画機関

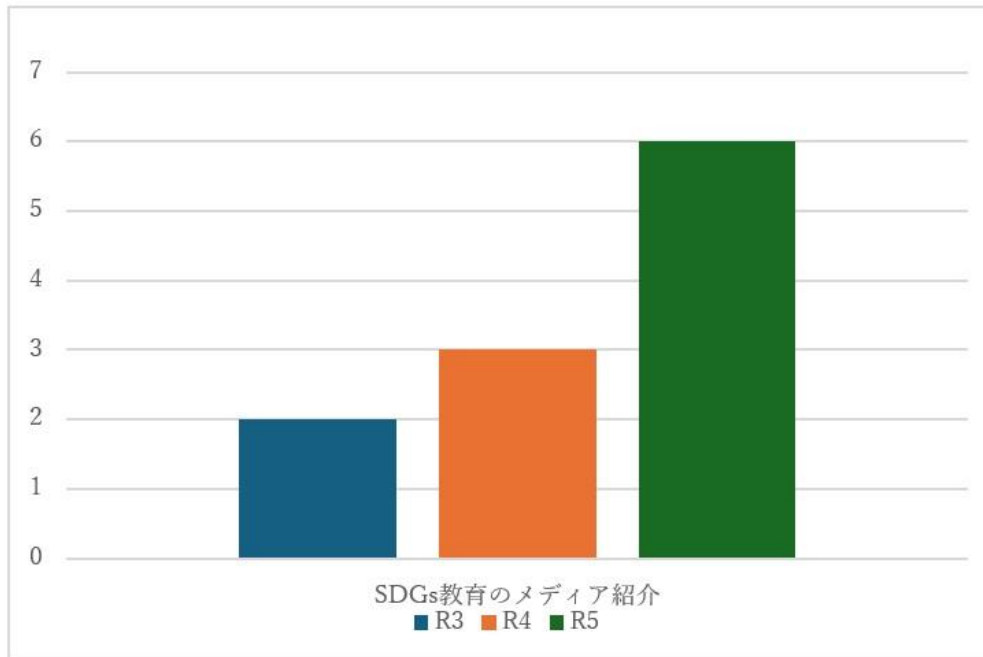
青南商事 / 株式会社コバヤシ / 日本システムケア / 宮城県産業技術総合研究所 / 株式会社 ROOTS / 株式会社ヨシムラ

静岡大学 / 芝浦工業大学 / 東北大学 / MS&AD / Dow Chemical



・2023 年の主なメディア紹介

- a. 【SDGs 推進 東松島市、東北大と連携 市内6小学校で出前授業】河北新報、2023 年 7 月 29 日
- b. 【‘二酸化炭素排出減らすプラスチックも’ 小学校で「SDGs」出前授業(宮城・東松島市)】みやぎテレビ ニュース, 2023 年 7 月 10 日
- c. 【「スマホ 200 台で金メダル1個」小学校で SDGs 出前授業】みやぎテレビ ニュース, 2023 年 6 月 20 日
- d. 【小学生が学ぶ「SDGs」スマートフォンから取り出されたのは...】仙台放送 ニュース 2023 年 6 月 20 日
- e. 【“持続可能な街づくりを” 小学生が SDGs 学ぶ 東松島】NHK ニュース 2023 年 6 月 19 日
- f. 【「スマホ 200 台から金メダルがやっと 1 個できる」資源リサイクルの大切さ学ぶ 宮城・東松島市】東北放送 Nスタ 2023 年 6 月 19 日



宮城 NEWS WEB

“持続可能な街づくりを” 小学生がSDGs学ぶ 東松島

06月19日 12時07分



した。

東松島市の小学校では、国連が掲げる持続可能な開発目標＝SDGsについて子どもたちが学ぶ特別授業が行われました。

この授業は、東松島市と東北大学が共同で行っているもので、会場の矢本西小学校の体育館には4年生の児童およそ50人が参加しま

小学生が学ぶ「SDGs」スマートフォンから取り出されたのは... (宮城)

6/20(火) 20:06配信



仙台放送

小学生たちが「SDGs」について考えました。政府が定める「SDGs未来都市」に選ばれている宮城県東松島市の小学校では、資源のリサイクルをテーマとした特別授業が開かれました。



ニュース

廃プラスチックの識別能力向上で再利用へ 東北大学などがNTTグループの協力で実証実験

2/26 (月) 16:45 # 岩内 # 宮城県 # 仙台市



東北大学などは、識別が難しいとされる黒色のプラスチックの材質識別を可能にする装置を開発しリサイクルに向けた実証実験を始まりました。

[3] 産学連携による研究成果の社会還元

①東北大学 GAP FUND PROGRAM に採択

劉庭秀教授が東北大学の研究成果を活用した事業アイデアの検証を支援する GAP FUND PROGRAM プログラム(500 万円/年)に採択「テラヘルツ波を用いた持続可能な資源循環ビジネスの創出」

- ・令和5年度仙台市スタートアップスタジオ構築プロジェクト・ハンズオン支援プログラムに採択
- ・イノベーションリーダーズサミット:TOP100 社入選
- ・2023 年にお問い合わせがあり、面談を行った企業・団体数は 46 カ所に上る。

[表 問い合わせ・面談企業及び団体リスト.pdf](#)

②特許出願(3月中に出願予定、現在は学内・弁理士手続き中)

出願者: 劉庭秀教授、眞子岳特任助教、大窪和明准教授






・東北大学管理番号 P20230108: ペットボトルキャップの材質識別とペットボトルキャップを利用した教育用装置(本部負担)

・東北大学管理番号 P20230237: テラヘルツ分光情報による分子量推定(本部負担)

③環境型社会実験の実施

「食品トレイ回収の社会実験・社会調査」、群馬県ベイシア伊勢崎店、2023年8月4日～5日

「ペットボトルキャップの資源循環を目指した材質識別」、NTT 東日本、東北事業部・宮城支店、2024年1月26日～27日

 [図1 研究費受入\(産学連携\).png](#),  [図2 SDGs教育の参画機関、実施校、受講生の推移:R3-R5.png](#),  [図3 SDGs教育のメディア紹介の増加.png](#),  [図4 出前授業と社会実験の様子.png](#),  [表 問い合わせ・面談企業及び団体リスト.pdf](#)

2. 言語研究における国際ネットワーク構築と国際共著論文数の飛躍的増加

「研究」

No.18 (1)-1 自由な発想に基づく基礎研究の推進および新興・分野融合研究の開拓, No.16 (4)-1 世界から学生を惹きつける最先端の国際プログラムの開発・提供等

実績報告

[1] 令和5年度は、本研究科だけでなく、東北大学が海外の共同研究パートナーとして重視するユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)の研究者及び両大学の大学院生と第二言語習得、神経言語学、心理言語学をテーマにした国際共同シンポジウム(Tohoku-UCL SLA Joint Symposium)を主催した。本シンポジウムはオンラインで日英両国から同時に開催され、両国を含め14か国から100名以上の研究者・学生・教員が参加した。参加者による事後アンケートでは、シンポジウムの全体的な評価は非常に高く、回答した全員がこのシンポジウムの内容が自身の研究に有益だったと評価している。本オンラインイベントが契機となり、令和6年度6月初旬にUCL所属研究者が東北大学国際文化研究科への訪問を予定している。

[言語① Tohoku-UCL Symposium.pdf](#)

[2] 上記の他に、令和5年度は9件の講演会を実施した(うち、英語の講演は7件)。講演者の所属先は、日本の大学、研究機関に加え、北米(デラウェア大学)、ヨーロッパ(ルーベン大学)、アジア(香港理工大学、福建師範大学、国立屏東大学[台湾]、国立政治大学[台湾])であり、第二言語習得を中心とした言語科学研究の国際ネットワーク構築が進展していることがわかる。事

後アンケート結果によると、どの講演会も 9 割以上が満足・非常に満足と回答があり、高い評価を得ていることがわかった。

[言語② Special lecture Ping Li.pdf](#)

[言語③ 陳燕青講演会.pdf](#)

[言語④ Special lecture Yui Suzukida.pdf](#)

[言語⑤ Special lecture Keith Tong.pdf](#)

[言語⑥ Ishii Keita talk.pdf](#)

[言語⑦ Special lecture Eva Puimege.pdf](#)

[言語⑧ 葉秉杰講演会.pdf](#)

[言語⑨ Masahiro Yoshihara.pdf](#)

[言語⑩ Ayaka Sugawara.pdf](#)

[3] 上記の取組の具体的な成果として、言語脳認知総合科学研究センター所属の教員がユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの研究者と国際共著論文 1 編を *Studies in Second Language Acquisition* (Cambridge University Press) から出版した(著者のうち、太字・下線は本センター研究者、下線はユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの研究者)。当ジャーナルは Google Scholar 集計の言語・言語学部門ジャーナルランキング 1 位となっている(2024/3/14 時点)。

K. Saito, T. Uchihara, K. Takizawa, and Y. Suzukida. 2023. Individual differences in L2 listening proficiency revisited: Roles of form, meaning, and use aspects of phonological vocabulary knowledge. *Studies in Second Language Acquisition*.

DOI: <https://doi.org/10.1017/S027226312300044X>

令和 5 年度は、上記で述べたさまざまな活動を基盤として、若手でありながら国際的に活躍する新人教員の加入により、同センターの所属教員(国際文化研究科本務教員)6 名による国際共著論文が前年度を大きく上回る増加を見せた。特に、令和 3 年度 11 編、令和 4 年度 9 編であった論文が、令和 5 年度には 23 編にまで達したことは注目に値する。発表された論文の多くは世界と伍するレベルのものであり、世界トップ 10% にランクインする著名ジャーナルに掲載された 14 編が含まれている。なお、その内の 3 編は、本研究科の大学院生、ポスドクが筆頭著者になっている。また、令和 5 年度の出版論文の中で、FWCI(Field-Weighted Citation Impact)がトップ 10% に入る引用数を記録しているものがすでに 4 編存在しており、これは本研究科の言語科学研究が世界的に見てもトップレベルにあることを示している(論文の評価は Scopus の解析ツールである SciVal を使用)。

これらの成果は、本研究科における言語科学研究の活動が質と量の両面で顕著な進歩を遂げていることを物語っている。今後、国際共同研究の加速によって、より大きなインパクトを持つ研究

成果を世界に発信し続けることが期待される。本研究科は、世界の言語科学研究の発展に寄与し、新たな研究の潮流を生み出すことを目指している。

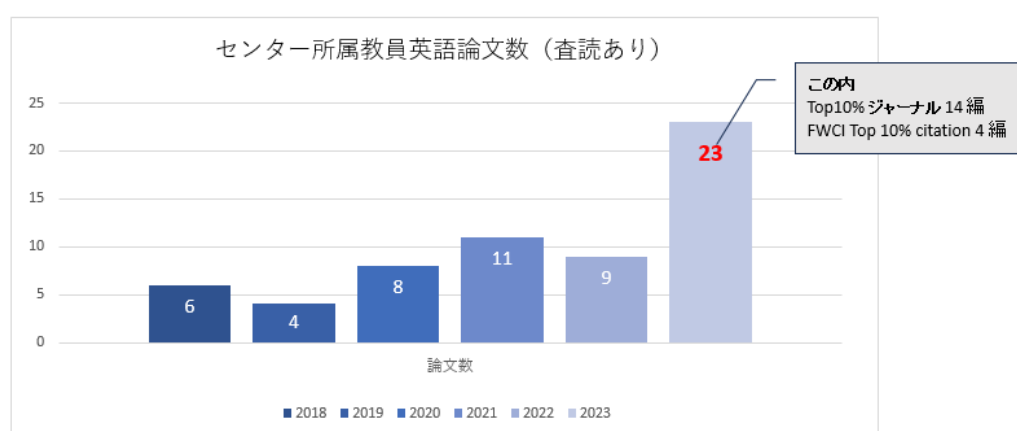
言語脳認知総合科学研究センター所属教員英語論文数(査読あり)

年度	2018	2019	2020	2021	2022	2023
論文数	6	4	8	11	9	23

令和5年度言語脳認知総合科学研究センター所属教員英語論文数(内訳)

	教員A	教員B	教員C	教員D	教員E	教員F	Total
Q1	5	3		6		1	15
Q1の中でTop 10 % journal	<5>	<2>		<6>		<1>	<14>
FWCI Top 10% citation	<1>			<3>			<4>
Q2					1	2	3
Misc	1		1				2
Book chapter	2			1			3
Total	8	3	1	7	1	3	23

下図は推移を表すグラフである。令和5年度は英語論文数がこれまでに比べて飛躍的に伸びている。



[言語① Tohoku-UCL Symposium.pdf](#), [言語② Special lecture Ping Li.pdf](#), [言語③ 陳燕青講演会.pdf](#), [言語④ Special lecture Yui Suzukida.pdf](#), [言語⑤ Special lecture Keith Tong.pdf](#), [言語⑥ Ishii Keita talk.pdf](#), [言語⑦ Special lecture Eva Puimege.pdf](#), [言語⑧ 葉秉杰講演会.pdf](#), [言語⑨ Masahiro Yoshihara.pdf](#), [言語⑩ Ayaka Sugawara.pdf](#), [表1 言語脳認知総合科学研究センター所属教員英語論文数.png](#), [表2 令和5年度言語脳認知総合科学研究センター所属教員英語論文数\(内訳\).png](#), [図 センター所属教員英語論文数.png](#)

3. 学際的日本学・日本研究における国際連携の推進

「研究」

No.18 (1)-1 自由な発想に基づく基礎研究の推進および新興・分野融合研究の開拓, No.16 (4)-1 世界から学生を惹きつける最先端の国際プログラムの開発・提供等

実績報告

東北大学では統合日本学センターが開設され、人文社会科学における価値創造戦略の一環として国際的な日本研究ネットワークの構築が急速に進められている。その一翼を担っている本研究科は、他部局に先駆けて国際的・学際的な視点からの日本研究を推進する講座を設立し、これまで海外の有力大学との研究連携や国際的に活躍する著名な日本研究者との共同研究を実施してきた。令和5年度も、本研究科が日本研究の重要なパートナーと考えている米国・シカゴ大学との国際合同ワークショップ、タイ・タマサート大学及び国立開発行政大学院大学との国際合同シンポジウムをはじめ、海外の著名な日本研究者による講演会、ワークショップ等を開催し、より緊密な研究連携を構築した。さらに、これらの成果を、日本研究を専攻する本研究科学生の教育に波及させる取り組みを実施しており、その成果として学生による国際的に定評のあるジャーナルへの論文出版、海外の有力大学での公開講演などが行われた。

[1] 東北大学、シカゴ大学、東京大学の3校が中心となり日本研究に関する国際ワークショップ(The Workshop 2024: Cooperative Research Meeting of International Japan Studies Graduate Students in 2024)を開催した。シカゴ大学は本学、及び本研究科にとって海外の大学の中でもっとも重要な学術提携校のひとつとして位置付けられている。参加校の学生の発表も行われ、参加校の教員から助言を得る機会となり、国際的な共同演習の形となっている。本研究科からは、国際日本研究講座の近代日本思想・宗教研究グループより大学院生1名が研究発表を行った(Le Xing, "Buddhism and Asianism in the Taishō Period. ")。令和6年度は東北大学が主催校となり、国内外から日本研究者、及び大学院生を招聘する。

[日本学① Chicago-Tokyo-Tohoku.pdf](#)

[2] 部局間交流協定を締結しているタイのタマサート大学及び国立開発行政大学院大学(National Institute of Development Administration)との国際合同シンポジウムを開催した。タイは、本研究科が国際学術連携を進めていく上での東南アジア地域のハブであり、その中でこの2校は中心的な存在となっている。このシンポジウムは令和元年より毎年開催しているが、本研究科の修了生が発表だけでなく、大会運営にも参加している。大学院生の発表も含まれ、日本研究を共通項として各参加校の教員による国際的な視点からの学生指導を可能にしている。また、本シンポジウムが扱うテーマは、日本語、日本文学、日本文化、宗教など多岐にわたり、まさに学際的な共修の場となっている。

[日本学② Thammasat-NIDA-Tohoku.pdf](#)

[3] 本研究科の英語プログラム「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム(Graduate Program in Global Governance & Sustainable Development: G2SD)」主催で、国際シンポジウム Political Discourses on Religion in Contemporary Japan: Beyond the "New"? を開催した。これは、社会科学的手法による日本研究がベースとなるシンポジウムであり、本研究科における日本研究の国際性、学際性を示すものである。

[日本学③ Political Discourses on Religion.pdf](#)

[4] 上記の他に、国際日本研究講座の近代日本思想・宗教研究グループは以下に示す 7 件のワークショップ、研究会、講演会を開催した。いずれも外国人研究者を交えた国際的視点からの日本研究に関するものであるが、特筆すべきは、客員教授として本研究科に受け入れたスウェーデン・セーデルトーン大学の Per Faxneld 准教授、及び世界的に著名な仏教学者である南山大学名誉教授の Paul L. Swanson 先生の講演である。宗教学を中心に文学、政治学にわたる学際性をアピールするこれらの研究会、講演会の多くは本学文学研究科、また東京大学をはじめとする他大学との共同開催となっており、本研究科の日本研究の学術連携の広さを示している。

[日本学④ Rethinking Postwar Japanese Politics.pdf](#)

[日本学⑤ Rethinking Contemporary Shinto.pdf](#)

[日本学⑥ Disciples of Hell The History of Satanism.pdf](#)

[日本学⑦7 Satanic Feminism.pdf](#)

[日本学⑧ The Task of the Buddhist Translator.pdf](#)

[日本学⑨ 近現代日本における改革と革命の宗教思想.pdf](#)

[日本学⑩ 日本学研究会\(東北大学\)・第 5 回学術大会.pdf](#)

[5] 上記の取組の結果、国際日本研究講座の近代日本思想・宗教研究グループでは、令和 5 年度に、博士後期課程在学の大学院生 2 名による査読付き論文 3 編(うち英語論文 1 編)、研究発表 13 件(うち英語発表 7 件)、公開講演(招待)1 件(アムステルダム大学)の成果が得られた。

[日本学⑪ Han's Lecture.pdf](#)

[日本学① Chicago-Tokyo-Tohoku.pdf](#), [日本学② Thammasat-NIDA-Tohoku.pdf](#), [日本学③ Political Discourses on Religion.pdf](#), [日本学④ Rethinking Postwar Japanese Politics.pdf](#), [日本学⑤ Rethinking Contemporary Shinto.pdf](#), [日本学⑥ Disciples of Hell The History of Satanism.pdf](#), [日本学⑦7 Satanic Feminism.pdf](#), [日本学⑧ The Task of the Buddhist Translator.pdf](#), [日本学⑨ 近現代日本における改革と革命の宗教思想.pdf](#), [日本学⑩ 日本学研究会\(東北大学\)・第 5 回学術大会.pdf](#), [日本学⑪ Han's Lecture.pdf](#)